

れもん

かじいもとじろう

檸檬

梶井基次郎

青空文庫を元としています

参考 … ウィキペディア



「檸檬」

大正十四年一月同人誌に発表された。梶井二十四歳の時の作。梶井の処女作であるとともに代表作である。

大正十四年には普通選挙法と治安維持法が成立した時期であり、社会は国家統制へと激しく動き始めた時期であった。

鬱屈した心を抱えた主人公は、なにをする気も起きず、京都の街をあてどなく歩み、ふと檸檬を手にとり、その感触に気持ちが緩む。そのまま丸善書店に入ると、そのレモンを爆弾に見立てて、画集などの上に置いて立ち去った。木端微塵になる様子を思い描きながら、得も言われぬ気分となる。

「——それをそのままにして私は、何食わぬ顔をして外へ出る。——私は変にくすぐったい気持ちがあった。…(中略)…丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。」

都会の青年の魂の咆哮と透明な感性、精緻な知性の融合した詩的な文体を持つ作品で、日常生活の中に意外な深淵を垣間見る経験を与え、小林秀雄と三島由紀夫がそれぞれ違った観点で絶賛するに至った。

なお、この作品の発表以後、実際に京都の丸善で檸檬を置くという行為が何度もあったと言われている。

筆者 梶井基次郎、一九〇一年明治三十四年)〜一九三三年昭和七年。享年三十一才。生前二十編の短編小説を発表した。大阪で生まれ、肺結核を病み、最後大阪で死去している。繊細で鋭敏な感覚を、日常の何気ない生活の中に捉えた作品群は、日本文学の代表作の一つとなっている。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。焦躁といおうか、嫌悪といおうか——酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやってくる。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上がつてしまいたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

なぜだかその頃、私は見すばらしくて美しいものに強ひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったり、がらくたが転がしてあったり、むさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に帰つてしまふ、と言つたような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかつていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵があつたりカンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出た旅館の一室。清浄な蒲団。匂のいい蚊帳と糊のよききいた浴衣。そこで一月ほど何も思わず横になりたい。希わくはこがいつの間にかその市になつていのだつたら。——錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。